

2020年 春期

即解ゼミ 体験授業
現代文

〈センター試験と共通テストの第1問の違い（予想込み）〉

センター試験	センター試験	共通テスト
時間	20分	20分
題材	評論文	論理的・ ¹ 文章
分量	本文約四千字	中心的文章は減少+資料
問1	漢字	漢字?
問2~5	傍線部説明○理由	²
問6	表現・論の構成	表現・論の構成?
選択肢	五肢一択が中心	五肢一択が中心?

〈共通テスト第1問に対する読解法〉

【読み】

傍線が減少した分、「精読」より「³」による主張の把握が重要。

【解き】

問2~5の問題の見極めが重要である。

- (1) 本文全体から探すのか、部分的な問題か
- (2) 別の資料も見るとか、見ないのか
- (3) 多様な設問形式への対応

〈既存〉 傍線説明、傍線部理由説明、具体例選択、授業形式、対話形式

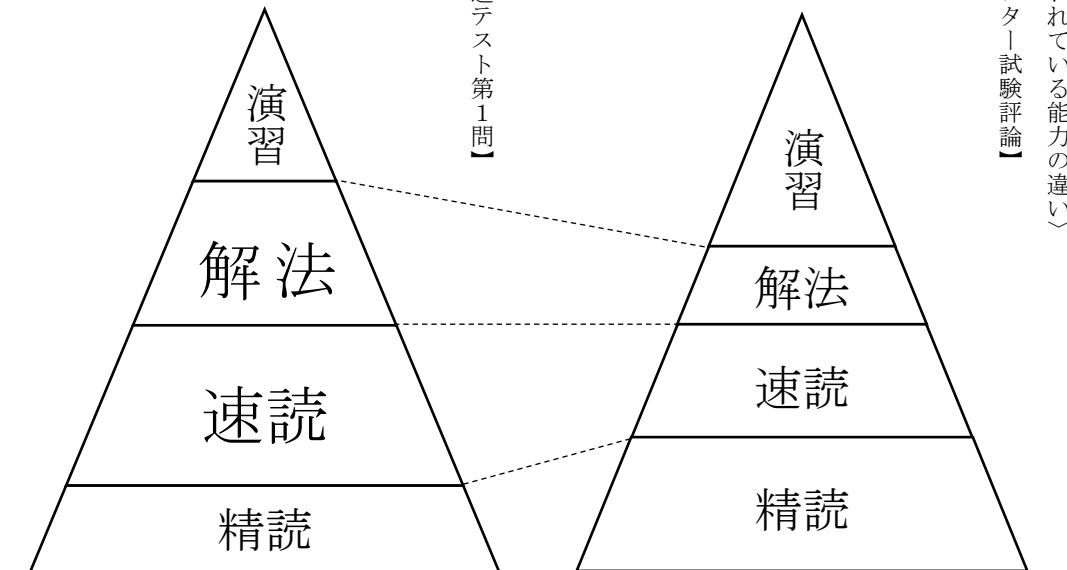
〈新規〉 初見語句の説明問題、空欄補充問題、

図・表の意図問題、結論から発展させた内容

〈問われている能力の違い〉

【センター試験評論】

【共通テスト第1問】



（即解ゼミの共通テスト第1問の方針）

- ① 4～7月「精読」の基本を押さえた上で、「速読」に向けたトレーニング
- ② 9～10月「速読」を洗練させつつ多様な設問の「解法」を身につける
- ③ 11～1月「速読」＋「解法」で、自分で高得点を取れるようにする

（勉強法）

① センター（共通テスト） 評論の特徴

初見の長文を短時間で読み、問題を解く。

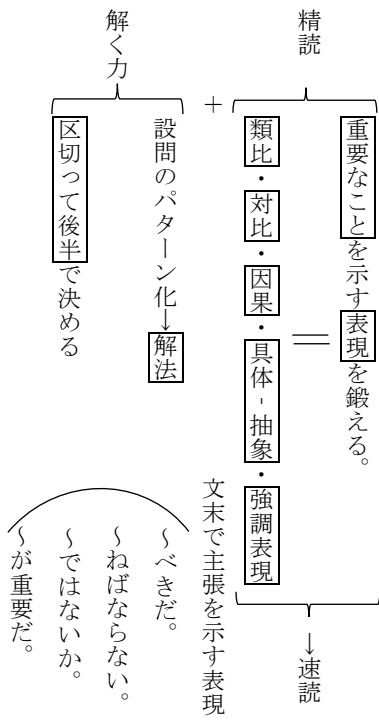
② センター（共通テスト） 評論の意図

重要なことを素早く読ませたい。

（質） （量）

③ センター（共通テスト） 評論の勉強法

重要なことを示す表現を鍛える。



【表①センター試験評論文のタイトル／本文文字数】

年度	タイトル	文字数
2020	境界の現象学	3200
2019	翻訳をめぐる七つの非実践的な断章	4200
2018	デザイン・リアリティ	4600
2017	科学コミュニケーション	4200
2016	キャラ化する／される子どもたち	3500
2015	未知との遭遇	4200
2014	漢文脈と近代日本	3700
2013	罅	4200
2012	境界としての自己	3600
2011	身ぶりの消失	3800

【表②センター試験評論文問2～5でポイントとなる表現】

年度	難易	問2	問3	問4	問5
2011	難	問2	問3	問4	問5
2012	標	類比	対比	類比	対比
2013	難	類比	対比	具体	因果
2014	難	強調	具体	因果	類比
2015	標	因果	類比	強調	強調
2016	標	対比	対比	因果	類比
2017	標	類比	類比	類比	対比
2018	標	類比	類比	類比	対比
2019	易	類比	類比	対比	具体
2020	難	問2	問3	問4	問5

【練習問題】 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問いに答えよ。

【文章Ⅰ】

そもそも「科学」とは何か。

英語で表すと「science」（サイエンス）だが、元々の語源はラテン語の「scientia」（スキエンティア）という言葉に由来する。この「sci」というのは「知る」、「entia」というのは「成す」という意味を表す。「知るを成す」——すなわち、総合的な知識を得るという意味だ。つまり、「science」という言葉は、本来は自然科学のみを指す言葉ではなく、さまざまな分野のさまざまな知識を得るという意味で使われていた。もっぱら自然科学のみを意味するようになったのは一九世紀半ば頃になってからである。

したがって、簡単に整理するならば、理論と実証によって客観世界・自然世界の普遍的な原理や法則を発見することが「科学」。
別の表現をすれば、研究によって獲得し、実験によって確立した知識とも言える。つまり、X。

加えて、A科学には、いくつかの満たさねばならない要件がある。

10 例えば合理性。これは道理に^{かな}適しているということ。それから論理性。すなわち筋道が通っているということ。そして実証性。実験や理論によって証明できるということ。それに普遍性。一つの事例だけに適用できるのではなく、似たような事例、あるいは質の違った事例にも適用できるということが重要である。それから無私性。個人の意向や願望に左右されないということ。自分自身が「こうあってほしい」「絶対こうあるはずだ」と思う気持ちはもちろん大事だが、科学とは本来、そういう個人的な意向や希望・願望とは無関係に成立するものなのだ。

15 それから懐疑主義の必要性。つまり、疑義や批判を怠らないということ。実際、科学者というものは疑ぐり深い人種だ。あの結果を示されたとき、それが本当かどうか必ず疑う。疑って疑って、そのうえで納得したときに、初めて「正しい」という言葉に到達する。真理を得るためにはまず疑うことが必要なのである。そして最後に、公有性。誰もが同じように使えるということ。つまり、「どい^どでも、いつでも、誰でも」が成立して初めて「科学」と言える。

（池内 了^よ「それは、本当に『科学』なの？」『考える方法』による。）

【文章Ⅱ】 次は、文化人類学者の梅棹忠夫と、物理学者の湯川秀樹の対談である。

梅棹 先生は小説をお書きになったことがありますか。

湯川 童話ぐらいやったら書けるかもしれませんが、小説までは一度も考えたことはないです。一つは小説を書くといふのは、結局九〇パーセントまで勇氣の問題やね。自分の中の障害を突破して書く。これをしなきゃいかんでしよう。一種の捨身ですわね。「そうしなければ、おもしろいものができない。詩や和歌や俳句となると話は違うでしょうが……。そういう勇氣の問題が一つあります。B 科学というのは、あまり勇氣と関係ない。

梅棹 私もそういう気がするんです。

湯川 なにか、科学というのは、よそごとにするわけでしょう。

梅棹 自分というものとかかわり合いを考えると、科学というものは、自分自身を自分自身でなくする作用みたいなものがありますね。

10 湯川 科学というのはそういう態度でないといかん、そういう態度にならんと科学はできんということ、ものの考え方を自己規制する。自己規制はつらいかもわからんけど、同時に逆にいうたら、自分のことでないようにするわけやから、楽でもあるわけやね。たとえば論理が厳密でないといかんとか、実証がしっかりしてなきゃいかんとか、強い規制がある。そのかわり自分に関係ないことに話をもつてゆくから、気は楽やというわけです。

15 梅棹 こういうふうにかけてみたくて。科学というのは、一種の自己拡散の原理である。自分自身をどこかへ拡散させてしまふ。自分自身をなにか白のようなものの中に入れて、枠かまでこなごなにくだいて粒子にしてしまふ。それを天空むかに向つて宇宙にばらまくような、そういう作業だということです。自分という統一体をなくしてしまふ。自分というものはどっかに消えてしまふ。こなごなになって、消えてしまふことによつて、自分というものが統一体として存在したときにはどうてい関係の結ばなかったようなものと関係してしまえるんだ。そういうことです。

20 だから、はるか昔のことも科学の対象とすることができる。はるか未来のことにもなんらかの関係を考えることができる。極微の世界とも、無限の宇宙とも、われわれは関係を持つことができる。そういう自己拡散ということがなければ、自己の

ところにエネルギーが凝集している限りは、われわれが関係を結べる相手は非常に限られてしまう。結ぶべからざる関係を、結ぶべからざる相手と結ぶ。科学というのはそういう仕事でしょう。

湯川 その拡散の方向はいろいろありますけれども、とにかく遠いところにゆく方が、かえって安心感みたいなものがあるね。まえに人間離れという話をしましたけれども、人間離れということにはいろいろな意味がある。一つはそういう遠いところへ返って行って、根元を求める。いつべん遠いところにゆく。その上で、いろいろなものを、新しい仕方だまとめようとする。そういう仕事です。その点でも、ほかの活動と性格が違うと思いますね。

梅棹 違うんです。よく日常の科学ということをいいますね。私はこの言葉には原理的に矛盾があると思うんです。科学というものは、非日常的なものを考えるから科学になるのであって、日常体験の中からは科学は出てこないということですね。そうはいえませんか。

(湯川秀樹・梅棹忠夫『人間にとって科学とはなにか』による。)

問1 空欄Xに当てはまる言葉として、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① いくつかの要件を満たさなければ、それは「科学」と言えないのである
- ② この知識は、客観世界・自然世界以外のさまざまな分野にも応用できるのだ
- ③ 研究し、実証するということが科学にとって非常に重要なことなのだ
- ④ 語源を研究し、言葉本来の意味を知ることが、科学を学ぶために必要なことなのだ
- ⑤ 実験によって得た知識を、研究によって実証することによって科学は成立するのだ

問2 傍線部A「科学には、いくつかの満たさねばならない要件がある」とあるが、この要件に沿った科学者の行動として、**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① ある事象が起こったときは、その結果が本当かどうかをとことん疑う。
- ② 研究によって得た知識を正しく扱える専門家の間で共有化し、高度化させる。
- ③ ある事象が正しいかどうかを確かめるときは、筋道を立てて考えようとする。
- ④ 一つの理論が、似た事例にも当てはまるかどうかを、実証しようとする。
- ⑤ 実証された理論が自分の意向と異なっても、その結果を受け入れる。

問3 傍線部B「科学というのは、あまり勇気と関係ない」とあるが、これは【文章I】の傍線部A「科学には、いくつかの満たさねばならない要件がある」の要件のうち、どの要件のことを述べていると考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 公有性
- ② 懐疑主義の必要性
- ③ 普遍性
- ④ 無私性
- ⑤ 実証性

問4 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を踏まえて、授業で話し合いをすることにした。次の【会話文】の空欄Yに入るものとして、最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。

【会話文】

先生 では、この二つの文章についてどのような印象を持ちましたか。

生徒A 【文章Ⅰ】を読むと、「科学」というのは、満たさなければならぬ要件が多く、厳密な印象を持ちました。

生徒B 【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】とは対照的に、「科学」という活動には無限の可能性があると感じました。

先生 そうですね。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、ともに「科学とは何か」というテーマを扱っていますが、着目するところが異なるので、読者が受ける印象も異なるのかもしれませんが。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、それぞれのように着目していましたか。

生徒A はい。

。

① 【文章Ⅰ】では、科学を成立させる強い規制に着目しています。それに対し、【文章Ⅱ】では、さまざまな関係性を生む科学の規制の緩め方に着目しています

② 【文章Ⅰ】では、科学は、さまざまな規制の上に成り立っていることに着目しています。それに対し、【文章Ⅱ】では、「自己拡散」の原理は、ほかの分野にも応用できることに着目しています

③ 【文章Ⅰ】では、自然科学における科学の要件に着目しています。それに対し、【文章Ⅱ】では、自己にエネルギーを凝集することで科学が可能にすることに着目しています

④ 【文章Ⅰ】では、科学の規制が広い分野にも当てはまることに着目しています。それに対し、【文章Ⅱ】では、科学のものの考え方における自己規制に着目しています

⑤ 【文章Ⅰ】では、科学を成り立たせている規制に着目しています。それに対し、【文章Ⅱ】では、規制がある代わりに科学が可能にしていることに着目しています

問1				
	問2			
		問3		
			問4	